以上15の欲求の相対的強度を測定する検査です。その結果，当時でも女子青年が「達成」・「追従」・「顕示」・「内罰」・「持久」・「持久」・「支配」など，多くの欲求が標準化された時代と比べて大きく変化してきたことに気付きました。それ以来，毎年データを取ることになったのです。後に，1回生の男女学生を対象として，1970年に標準化されたデータとの比較で，男女差がどれくらいあるか検討しました。それによれば，男子学生は，「支配」・「内罰」・「攻撃」以外の欲求で変化がみられました。すなわち，男子学生は，困難な仕事をする気がなく（達成），人の指示にあまり従わず（追従），きちんとせず（秩序），目立ちたがり（顕示），自分を持たず（自律），友人を大事にし（親和），他人の内面についての関心が弱く（他者認知），依頼心が強く（求護），同情心に富み（養護），環境の変化を好み（変化），我慢強くなく（持久），性的好奇心が旺盛（異性愛）なのです。一方，女子青年では，「顕示」・「親和」・「救護」・「変化」・「自律」・「持久」といった欲求では男子青年と同じく明らかな変化をしめしましたが，「達成」・「秩序」・「他者認知」・「養護」・「異性愛」の欲求で変化はみられませんでした。このことから，少なくとも1986年時点においては，過去の青年像と比較して，女子青年よりもむしろ男子青年に多くの変化が生じていたことがうかがわれます。最近ではこの傾向がより高まっていると考えられます。女子青年より，男子青年の欲求の変化がはなはだしいのです。さらに1981年から1995年にわたる，女子青年を対象としたデータを分析すると，10数年の間に変化した欲求があることが分かりました（Fujimura, 1996）。「顕示」・「自律」・「攻撃」が強くなり，「内罰」が弱くなってきているのです。変化した欲求の例として「内罰」の経年的変化をしめしました（図1）。

さて，原稿を入力している時，偶然に現実の社会を鋭く描くので有名な新進気鋭の社会学者である宮台真司氏の対談を見ました。彼は教育改革に関しても発言し，自己決定能力と他者との関係について具体的な分析をしています。彼によれば，他者と無関係に自己決定のプロセスを辿ることはありえない。そこには，①他者の話を聞くことなど，決定を助ける情報を収集する能力。②決定を実行に移す際他者を動機づけたり（モチベーション），説得などのコミュニケーション・スキルの能力が必要となる。この2点を重要視したのです。もちろん，自己決定後の失敗に耐える能力（トレランス）も重要となってきます。このような青年に関わる社会問題や教育問題の社会学的分析を見るにつけ，最近の青年の欲求の変化のはなはだしさを記述する作業に携わる者として，既に発達心理学を始めとする諸分野でモチベーションなどに関する基礎的研究が進んでいることに意を強くしました。これら社会問題に関わる際，基礎と応用（現場）の協力が切に望まれます。

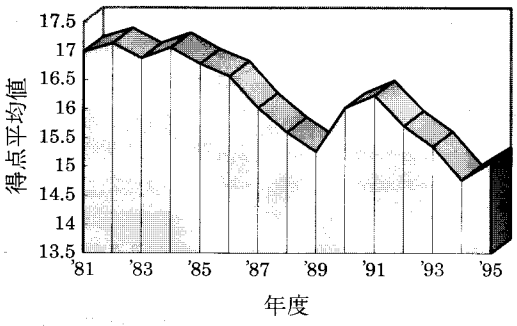


**図1　各年度における「内罰」の得点平均値**

＊藤村邦博さんのプロフィール＊　大阪薫英女子短大を経て，今春新設の大阪人間科学大学に異動。もっぱら紙と鉛筆で主に女子青年の嗜好に関して定点観測している。地下ガレージに小さな映像アーカイブ（言い過ぎか）を構築。暇を見つけては，積極的ひきこもりを（？）を楽しんでいる。

## 青年期における自己形成プロセスの解明に向けて

**水間　玲子（京都大学大学院教育学研究科）** rei_mi@olive.freemail.ne.jp

従来指摘されてきた青年の特徴の一つに「青年期は自己へと目が向きやすい時期である」ということをあげることができる。自己意識の高まりが個人にとっていかなる意味をもつのかについては，社会心理学においても検討されてきた。そこでは，自己意識の高さは自己の肯定性を阻害する否定的影響をもつものであることが明らかにされた。自己の正確な姿を認知することができること，周りの情報に惑わされにくいことなど自己意識の高さに関する肯定的側面も指摘されたが，正確な認知をせずとも自己を肯定的にとらえることが精神的健康に重要だという近年の見解を含めて考えると，自己への意識の高さは適応や精神的健康にとってあまり歓迎されることではないと理解される。

ただし，青年期は「自己の再構築」がなされる時期であると言われるとおり，自己形成のプロセスを考えていく上では非常に興味深い時期である。そのことを

ふまえると，自己への意識の高まりは自己形成を促進する一助として意味づけることができる。自己に目を向けることによって既存の自己が疑われ，自己の再構築が促進されるという一連の過程においては，自己意識の高さは，たとえそれが一時期の否定性を伴おうとも大きな役割を果たすものととらえることができるのである。青年心理学で自己形成を論じていこうとする場合，必ずこの視点が念頭におかれる。現時点にとどまらず，後続する変化を含めて現象を意味づけることができるというのは，青年に限らず発達心理学の大きな特徴であるといってよい。

ところが，青年心理学においてその変化の過程が十分に検討されてきたかというとそうではない。否定性が肯定的なものへと転化する際には，その現象の意味構造が変化する必要がある。では，そのプロセスはいかに進行するのか。また，否定性に陥った青年誰もが否定性を自己形成のプロセスへと転化しているとは限らないし，否定性に陥らずとも自己形成される側面がないわけでもない。彼らがたどるプロセスはどのように異なるのか。否定性を通しての自己形成というプロセスを想定することはできるが，その実際の変化過程についての理解はあまりなされていないように思う。

変化前の状態と変化後の状態の比較にとどまらない，変化の過程へのアプローチは，非常に難しいものであるが，「自己の再構築」を特徴とする青年期の自己形成を語る上では重要性の高い問題となる。そこで，ここでは，従来の青年心理学における問題点と照合しつつ，「変化」過程を含む青年の自己形成の理解において求められる視点を二点あげてみたい。

第一は，青年のもつ肯定的側面に対する理解である。否定的な様相についてはかなりの言及がなされているが，それを肯定的なものへと変化させる側面とは何か，また，いかに否定性を乗り越えていくのかなど，変化に仮定されてくる肯定的側面に対してはまだ明確にされていない。これは，従来の青年心理学が，青年の問題性を糸口に青年心理の解明を進めてきた故かもしれない。古くはHallによる「疾風怒濤」という形容があったし，その後も青年期特有の現象に沿う形で青年の心理が描写されてきた。否定的な現象というのは人々に「なぜ」という疑問を抱かせるし，また論ずべき問題としての必然性ももつ。それらの現象を通じて，青年の対人関係のあり方や人生観やモラルの問題，親子関係の問題などが浮き彫りにされてきた。それに対して，肯定的な側面は取りたてて問題にする必要がない分，その現象の扱いが難しい。自己形成プロセスについても同様で，既存の自己を疑い，新たな自己を求めて苦悩するという自己の否定性に直面する青年の姿が描かれ，むしろその否定的様相の解明に重点がおかれてきたように思う。だが青年期の自己形成プロセスを論じる際には，否定的側面のみならず，その流れを支える肯定的側面への理解も進められるべきであろう。肯定的側面を論じていくことは，下手をすると自己啓発的な扇動的なものになってしまうことがあるが，青年に関する肯定的側面への言及は，従来の見解とのギャップをもつという点で十分特筆すべき問題となると思われる。

第二は，社会的・時代的背景をふまえた上での青年の意識の理解である。青年は社会に身を置き，その時代を生きている。自己と対峙する瞬間も，そこには必ず他者や社会がその内的世界に布置されており，青年の意識もそれらとの関わりの中で構成されている。ただし，それを構成している社会や他者などは個人の主観によって切り取られたものであり，その意味構造も個人独自のものであるため，青年の意識と共に日々変化していると考えられる。その意味構造の変化に注目していくことで，青年の意識世界の力動をとらえていくことができるのではないだろうか。そのためには，青年がいかなる社会的背景，時代的背景の中で生きているのか，そこまで含めて青年をとらえていくことが求められる。

これらの点を考慮していくと，結果として青年をある程度分化して理解していく見方が求められてくる。その多様な青年像をいかにクリアな結論として提示していくかも付随する大きな問題となろう。

＊水間玲子さんのプロフィール＊　自己形成について，特に理想自己の問題を中心に検討中。青年の否定的現象について気になるのは，それが個人にとっていかなる意味をもつのかということと，それは未来においていかなる意味づけを与えられるのかということ。趣味は音楽，スポーツ，イラスト。読書は，江國香織，山田詠美，山本文緒など。

## 老年期における発達心理学の課題　－発達心理学にこそ求められていること－

**菅沼　真樹（日本学術振興会・東京大学）** GZQ04444@nifty.ne.jp

新世紀の主要な社会問題とは何かと問われたら，おそらく大多数の人々がその１つに老人問題を挙げることだろう。しかし危機感ばかりが煽られるわりに，「老人」そのものについての知識は一体どれくらいの